慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巫女と修験の歴史的変遷に関する宗教民俗学的研究： 陸中沿岸地方の神子を中心に
Sub Title	
Author	神田, より子(Kanda, Yoriko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.50 (1999.) ,p.52- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000050-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

題解決という視点からいつもクライエントを見つめていこうという姿勢が良い展開を生んだのではないだろうか。事例の提示は見事であったが，少し注文をつけるとすると，この事例の提示と第5章まで述べてきたこととの対応をつけるとよかったのではないかと思われる。例えば，この事例の中でもスキーマができたといっているが，どういうスキーマがどういうふうにできてきたかということを，第5章のD' Zurillの社会的問題解決モデルと結びつけてくれるとよかったのではないか，そうなるとさらに第6章の実験との連結もできたのではないか，と考えられる。また第6章での実験で図版1枚だけでなく，ここで使った図版と対比的な図版を提示することによって被験者の中に湧いてくる感情的認知的側面がもう少し豊かに捉えることができたのではないか。また，問題解決スキーマの形成は何度も何度も繰り返してだんだん作りあげられると指摘していたが，今回の実験がどの程度繰り返せば第7章にあるような実際場面に生かせる形になるのか，そのあたりの考察があったら面白かったと思う。さらに第7章では，治療は共同で治療関係を作り上げていくものだと事例で書かれているが，そこの情緒的つながりとか治療関係という要因が，第6章の問題解決のスキーマを形成する実験の時どういうふうに影響するのかについて考察すれば第5章と第7章にはさまっても文脈的連結がとれたのではないかと思われる。

このように本論文についていろいろ注文がつけられるが，本論文で展開していることはそれなりに高い評価に値するものであり，注文については今後の研究課題といえよう。認知科学を土台とした認知療法を問題解決スキーマの働きとみなし，その効果について実験で明らかにし，さらに認知療法の実践の見事な事例を示した研究は，わが国の認知心理学領域，及び臨床心理学領域の両者に貢献する研究である。筆者を研究者としても臨床家としても十分自律して行けると判断し，本論文は課程博士，博士（社会学）を取得するに十分な要件を満たしていると判断する。

社会学博士（平成11年6月9日）

乙　第3286号　神田より子

巫女と修験の歴史的変遷に関する
宗教民俗学的研究
—陸中沿岸地方の神子を中心に—

〔論文審査担当者〕

主査　國学院大学文学部教授・
慶應義塾大学名誉教授
文学博士　宮家　準

副査　元駒澤大学学長・
駒澤大学名誉教授
文学博士　櫻井徳太郎

副査　慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員
文学博士　鈴木　正崇

論文審査の要旨

本論文は巫女と修験という超自然的な存在と人々の間に立つ媒介者として活動する宗教的職能者の実態を，民俗調査と文献史料を合わせ用いながら，その歴史的変遷を解明して，宗教民俗学的に考察している。考察の対象の中心は岩手県の陸中沿岸地方を中心に今でも宗教活動を続けている巫女である。彼女らは自身を「神子」と称し，近世期には修験道の各派に所属していた。その解明にあたっては修験との関わりの歴史的な変遷を中心に，その生活誌や現在の宗教活動を遡及的に考察し，宗教的世界観を分析した。従来の民俗学や文化人類学の宗教的職能者の研究は現行の実態に基づくものが多く，本論文のように多くの歴史史料と聞書の伝承から厚みのある考察を加えたものは殆どなかった。また，従来の研究では修験と巫女は個々に考察がなされており，その相互関係について本格的に取り組んだのは本論文をもって嚆矢とする。その意味で本論文は学界への大きな寄与である。本論文は全4部からなり，以下のように構成されている。

序　論
第1部　巫女の研究史
　第1章　日本民俗学における巫女研究史
　第2章　宗教学・精神医学・文化人類学におけるシャーマニズム研究史
　第3章　巫女と修験の関わりに関する歴史的研究
　第4章　本論の視点—地域研究と巫女
第2部　神子と修験の関わりの歴史的変遷
　第1章　歴史的概観
　第2章　近世期羽黒山正善院文書に見る神子の位置付け

第３章　近世期修験文書に見る神子の変遷
第４章　近世期陸中沿岸地方の神子の生活と社会
第５章　神仏分離令と近代の神子
第６章　語りの中の神子の伝承
第３部　陸中における神子の生活と地域社会
第１章　神子の系譜
第２章　神子の生活誌
第３章　神子と地域社会
第４章　禁忌と託宣
第４部　神子の儀礼と世界観
第１章　湯立託宣と神子舞
第２章　オシラサマ儀礼の諸相
第３章　治療儀礼
第４章　死者儀礼
第５章　神子の世界観
第６章　変身の論理
結　論　　新たな巫女と修験研究に向けて

第１部「巫女の研究史」では，陸中沿岸地方の神子を巫女の研究史の中に位置づけた。第１章で柳田國男の「巫女考」に始まる日本民俗学の研究史，第２章で宗教学・文化人類学・精神医学のシャーマニズム研究を取り上げた。東北の巫女研究に関する問題点を指摘し，本論文の視点として地域研究とシャーマニズムを結び付ける新たな枠組みを提出した。陸中沿岸地方の神子については従来の研究は空白のままであった。神子の特色は，死霊の呼び出しをするが口寄せ巫女とは分類できず，また神社や小祠で舞を奉納するが神社所属の巫女でもないことにある。それゆえ明治の神仏分離を経ても神仏習合の思想を現在まで引き継いできた。本論文は神子の活動とその歴史的な過程を考慮し，従来の日本民俗学の巫女の分類に新たに「修験系神子」という用語を加えることを提案する。

第１章と第２章の特色は研究史を踏まえて，神子と修験との関わりを歴史的変遷の中に位置付けたことである。神子は祭礼の折に法印や神楽衆と組んで湯立託宣を行ない，この関係の中では霊媒である。しかし，神子はその他の儀礼は一人で行なう。中でも病人祈禱や憑き物落しなど悪霊祓いの性格が濃い儀礼では，神子は自身を「行者」と表現して，修験の呪法を用いる。儀礼は修験から教えられ，そのまま踏襲している。また，神子の家には他界遍歴の話や山伏と験競べをして勝った話が伝わり，神楽衆は神子が三番叟を蘇生させた話を語る。筆者はこうした伝承をもとに修験道に見られる他界遍歴や，使役霊の操作，験力を使う者の姿などが神子に投影されていると考える。しかし，神子は修験と全て同じではない。神子は憑祈禱を行なわないし，一人で行なう託宣では，審神者を必要とし，当地方では一般の婦人がこの役に当たる。これは東北の他地域のイタコ，カミサマ，ワカなどの巫女とも共通し，東北の宗教文化として広く捉えられる。また神子には師資の伝授があり，修験道の影響下で宗教的形態が整えられた。神子は目が見え，託宣を語り，舞を舞い，行動と語りは盲目のミコよりも活発で動的である。そこで神子は石津照爾のいうミコと，修験道の験者の両方の機能と要素を持ったものと位置付けることが出来る。

第３章では修験と巫女の関わりの歴史的研究を概観して，巫女を政治・制度・社会の中で考察し，その背景を解明した。巫女の変遷では，中世の神楽の場で託宣や死者儀礼に関与した巫女が，近世期の社会の変革に伴って周縁に追いやられた経緯を重視した。一方，修験道の組織は，地域社会で信頼を得て人々の要請を得ていれば，巫女を積極的に取り込んできた。こうした神子の生活誌や伝承，儀礼の構造や世界観の分析には，宮家準が修験の憑祈禱を分析した枠組みを使用した。これによって，修験道に依拠していた神子が，憑けられる存在，霊媒としてだけではなく，修験者と同様な役割を果たしていたことが明らかになった。柳田國男が示唆したように，祭礼や神楽の場で重要なのは託宣で，それゆえに巫女が必要とされていた。制度や社会の変革に伴って巫女が退転した時，巫女に代わり男性巫者が登場した。憑けられる存在のみならず，憑ける側が変化することもある。また神楽の鎮魂や死者供養も重要で，神子の行なう死者儀礼や口寄せとの関連も考察した。

以上の研究史との関連から，第４章では近世から近代に至る神子と修験の歴史的変遷，現代に活躍する神子の分析を通して，神子と地域社会の人々が形成した世界観，彼女らが共有できる癒しの問題，そして神子が霊的存在と一体化した時に，それと共感出来る世界観を地域社会の人々も持っていたことを解明した。更に神子の儀礼で，神霊の憑依・託宣だけではなく，諸霊を操作する形に展開することを指摘した。神子の生活史を聞くと，成巫以前に何等かの意識変容を起こした経験をもつ者もいる。師資伝授だけではなく，他の宗教職能者に弟子入りしたり自分で儀礼のやり方を工夫した者もいる。そこで，これらをもとに神子を師資伝授を受けた巫女と，行者型から発展して新宗教の教祖ともなり得る巫女との中間的存在の巫女と位置付けている。

第2部「神子と修験の関わりの歴史的変遷」では，第1章で修験道組織内での神子の位置付けと地位，地域社会の中での神子の位置付け，神子の生活と文化を考察している。特に修験史料や地域に残る史料を具体的に比較して，近世期の神子の実態と特徴を明らかにした。その結果，彼女たちは修験に依存した存在ではなく，社会的にも経済的にも独立した宗教職能者だったことが証明された。

第2章では羽黒派修験を取り上げて，その内部の神子について考察する。延享3年(1746)の羽黒山の記録では，84人中82人が南部藩内の神子である。また近世中期の南部藩雑書では南部藩には元文3年(1738)には神子が311人で，閉伊郡には154人，寛保4年(1744)には274人で，閉伊郡には164人いる。羽黒派の神子と併せると，閉伊郡には飛び抜けて神子の数が多い。これを踏まえて，正善院蔵「延享三年改羽黒山派修験連名帳」を検討し，羽黒派の近世中期の神子は修験とは別に旦那場をもっていることなどにより，神子が独自の宗教活動を行なっていたと推定している。ここには，地域の人々の神子への信頼の高さゆえに，羽黒山や聖護院などの修験道の本山や吉田家などの社家が，神子を自派に取り込まざるをえなかった状況が現われていると考察している。

第3章では近世の南部藩を考察する。本山派の神子は数は少ないが，陸中沿岸地方に進出し，五戸の多聞院所属の神子や，八戸南部の神子は本山派聖護院から直接補任を受け，神子を自派に所属するものとして認識していた。豊間根の威徳院家に伝わる「過去帳」によると，陸中沿岸地方では寛延3年(1750)以降，俗家出身の神子が増加している。同時期頃から「優婆女」「僧都」「注連司」「比丘尼」などの特別な戒名が付与されている。この背景として，寛延3年(1750)以降，大規模な凶作，不作，海難があり，社会的な危機に対して，不安を解消するために修験や神子に多くの祈禱を要請したと推測している。

第4章では近世期の陸中沿岸地方の神子の生活と社会を考察する。八戸や五戸で，京都の聖護院やその院家の若王子との関連を示す史料を発見し，神子が在地の修験道組織の中でその地位を築いてきた様相を考察する。当地方では本寺から神子に対して，本山派修験の霞に類する「祈祭場」という宗教活動を認可された地域の名が文書に認められる。その場を巡って神子同士の争いもあり，これを避ける方策を講じた神子もいた。神子は地域社会の要請に応じ，地域の人々は精神生活を神子に依存し後継者を求めた。こうした状況が神子の家を存続させ，次代の後継者を養成していったという。ちなみに佐渡では近世中期以降，神子は俗家の者との縁組が認められなくなる。これは神子を組織内に取り込む際には好都合だが，組織が崩壊すれば神子も消滅する。しかし，閉伊地方の神子は俗家の出身でもよいし，夫が俗家でも構わず，五戸地方の多聞院所属の神子でも同様であった。即ち，陸中では組織の原理よりも地域の要請が強く，組織がそれに引き吊られて，神子を認めたこともあったと見られる。時代や地域が神子のあり方の相違を決定したとする。

第5章では，明治の神仏分離令と修験道廃止令以降を考察する。旧南部藩の閉伊地方の神子は地域の人々の要請に答える力量と才覚のゆえに，政治的な圧迫にも拘らず生き延びた。彼女たちは出雲大社教など明治維新後に出来た教団に所属して延命を図るなど，変動の中で自分たちの生き方を選びとってきた。この状況は組織を持たず，常に民間の人々の信仰と密接に結びついて持続してきた日本の巫女のあり方をよく示しているとする。

第6章では神子の家に伝わる他界遍歴の話，山伏との験競べに勝った神子の話，神楽衆の伝えた生き返った三番叟の話など，語りの中での神子の伝承を検討する。これらの話には，巫女たちの駆使出来た呪力への信仰が表出している。歴史の表面に表れない近世期の巫女の実態は地方文書や，人々の語りの中に生き生きと伝えられている。

第3部「陸中における神子の生活と地域社会」の第1章では，近世期に遡って，師匠から弟子へ，母から娘へと継承される神子の家の女性たちの系譜を辿る。近世の神子の後裔が，現在も人々の要請に応えて，様々な儀礼を行なっていた様相を明らかにしている。

第2章では現在活躍している神子の生活誌を分析する。明治時代になり神仏分離が施行され，神子たちも組織替えを余儀なくされた。神子は天台宗の尼僧になったり，神道祈禱修成派や出雲大社教に属するなど，環境の変化に柔軟に対応しているという。

第3章では神子と地域社会との関わりを人々の視点から探っている。人々が依頼する内容には，共同体レベルと，個人や家レベルがある。前者は神社祭祀が主で，特に例大祭は氏子総代が主催し湯立託宣を行なう。小祭では神宮の祭祀の後，ねまり託宣，春祈禱・秋祈禱，本家の同族の氏神祭祀などがあり，いずれも女性が中心となる共同体の祭祀である。オシラ遊ばせは同族祭祀でだけでなく，個人の家でも執行する。但し，後者は形式は

氏神祭祀と共通するが，内容は異なり，個人の運勢を聞くヒイミ降ろしがあって，聞き手の態度が真剣になる。ヒイミ降ろしは，家主体の春祈禱や葬儀の後清めの口寄せでも行なわれる。一方，口寄せは個人の依頼で様々な機会に行なわれるが，ヒイミ降ろしとは微妙な区別がある。個人の依頼で行なう後清め，厄祓い，病気治し，憑き物落とし，船の祓いなどには祓いの機能がある。神子は力強い唱え声やきびきびした行動で圧倒的な力を示し，祓われる側にその威力を示すと同時に，見ている依頼者を納得させる。依頼者は儀礼の時に掛けられる数珠の重さで神子の力量を実感し，神子の絹の千早に抱かれて安心感を抱く。これが地域の人々が神子に頼る理由であるとする。

第4章では禁忌と託宣を通して，地域の人々が神子に期待することや，神子を訪ねる動機を考え，その背景にある忌みとケガレの観念を分析する。神子は商売に必要なので，忌みやケガレを祓い対処する方法を身につけている。他方，カミゴトという名目の下で人々のイミやケガレの観念を助長してきた。人々と神子には認識のずれがあると分析する。

第5章と第6章では，神子が神懸かりとなって語る託宣とその内容，神子の経験とそれに対する信仰を検討する。神子の中には，修行で呪力を得たり，憑依や異常な体験をもつものもいた。そうした体験や素質は，修行中に師匠によって見出され，人々の側と神子が相互に交流しあう中で信仰が成立していった。それによって神子は人々から信頼を勝ち取り，自立した宗教職能者として今に至ったと考えた。

第4部「神子の儀礼と世界観」では，神子は超自然的な存在を憑依させる霊媒であると共に修験と同じく超自然的な存在を操作し，統御できる宗教職能者であると結論付ける。第1章では湯立託宣と神子舞の構造を検討する。湯立託宣は修験者が民衆にその力を示す手段でもあり，地域社会の要求を取り込む。ここには修験道の観念的で抽象的な世界を，民俗社会の要求に置き換える装置が組み込まれている。高神とトコロ神という二種の神々が招かれることはこの典型例で，湯立託宣と神楽の双方に見られる。湯立託宣には修験道の憑祈禱や，中国地方の司霊者と巫者からなるセット型の巫儀との共通要素もある。しかし，当地方の神子は，憑祈禱の霊媒や，西日本の神楽の巫者のように，受動的な霊の容器ではない。神子は修行を経て一人前になった独立した宗教職能者である。儀礼では一人で神霊や死霊を呼び寄せて，自らに憑依させることができ，法印や神楽衆と行なう湯立託宣の場では，積極的に自分で神を招き降ろし，儀礼の場をリードする力をもつという。

第2章では地域ごとの信仰と儀礼を取り込んで成立した変遷したオシラサマの儀礼を検討する。オシラサマは石津照爾のいう家の神としての観念が強いが，葬式に祀る地域もあり，「オコナイサマ」や「まいりのほとけ」との習合から先祖との関連も強く見られる。祭祀形態には二種あり，家の神の観念が強く巫女や行者に頼らず主婦が祭祀の中心になっている地域と，霊的な力を操作する巫女や行者がオシラサマに関わる地域があるという。直接に神の声を聞きたいと女性たちが望んだ時に，巫女たちはオシラサマを通してそれを可能にするのであり，磁場を与えるのだという。神との直接的な交流を望めば，同族と関わる女性祭祀集団に巫女を招き，地縁的な結合も加わる。しかし，男性の同族祭祀組織が強固な場合は，よそ者の入る余地はなく巫女を招いての祭祀は他の機会に譲る。これが二種の祭祀形態を生む要因となる。家の神の信仰は巫女との関係で機能が変化し，巫女の退転でカミオロシがなくなることで地縁組織が弱まり同族的な部分のみが残る，或いは巫女に代り他の宗教職能者が進出するなど選択は多様である。祭祀集団の形態についての動態的視点が神子の関わる儀礼には欠かせないとしている。

第3章では神子の治療儀礼の分析を行なう。神子はかつて修験道に属していたが，その自覚は既にない。治療儀礼には修験道の影響が強く見てとれるが，地域社会の人々と共有する意識となっている。神子の儀礼には修行を経て一人前になった巫女との共通性もあった。しかし，盲目の巫女とは語り口では共通するが，神子の儀礼は動的である。その力強さは修験の儀礼と共通し，依頼者を豊かな癒しの世界へと導く。それは神子が霊媒としてではなく，自立した宗教職能者として，自分の守護神と同化し，その眷属神を使役して，神々や諸霊を操作し統御する力を獲得していたからだとする。

第4章では死者儀礼を分析する。神子は死者が出ると依頼者の希望で葬式後の後清めと口寄せを行なう。陸中沿岸地方では，神楽巫女と口寄せ巫女が未分化のままである。現在の神子の口寄せは，新しいことかもしれない。しかし，当地方では神楽が家々を廻る時は，仏前や墓で神楽念仏を唱え，神楽衆の葬式には神楽が葬列の先導をする。神楽念仏の詞章には神子が読む祭文や経文との共通性もある。これは近世期に修験道の影響下で儀礼を行なっていた神子と神楽衆の共通の基盤とも言える。神楽念仏や墓獅子を演じる神楽衆と，死者儀礼を行なう神子

は，共に死に関わる。神子の死者儀礼は，中国地方での神楽が神道化する前の形態や，東北地方で盲目の巫女が行なう口寄せとの共通性もある。それは死霊の供養だけではなく，怨霊慰撫，特に死者の怨念の解消を目的とする。口寄せには死者がこの世の親族や子孫への恨みや怨念を語り尽くすようにとの配慮があり，凶癘魂になり得る死霊を鎮めようとの意図が込められているという。また，後清めは治療儀礼とも共通し，死霊を追い祓う観念が見られるとする。

第５章では神子のもつ宗教的世界観を分析する。陸中の女性にはカミやホトケの声を聞きたいという欲求が強く，それに応じて神楽や儀礼を通じて，神々の世界，霊魂の所在，災因などが語られる。祭り，春や秋の祈禱，オシラ遊ばせなどの託宣，ヒイミ降ろし，口寄せは今も需要が高く，神子の語る宗教的世界観は人々の要求に呼応して具体的である。これは神子が宗教職能者として地域社会と絶えず交流し，接触してきた成果である。一方神子はかつて修験道に所属し，その影響は強く残っている。抽象的で観念的な部分は，地域社会の中で絶えず変形し，新たに生成されてきた。その結果，地域独特の解釈が生まれ，神子の宗教的な世界観を形成してきた。神子の伝承には，天狗に導かれて異界を経験したという脱魂経験を語るものもある。また託宣や口寄せでは，神子に諸霊が憑依して語るので，神子は霊媒としての機能を果たす。一方，憑き物落としや治療儀礼で，神子は不動明王と同化して，諸霊を操作し神霊の助けを借りて儀礼を行なうとされる。このように神子は脱魂と憑依を合わせ持つ精霊統御者としての面を強く持っているという。

第６章では修験道の即身成仏の論理とそれを支える修行を中核に取り込んだ神子や神楽衆と，地域社会の人々との交流を通して，神子の変身の論理を考えている。神子も神楽衆の間にも根底には修験道に基づく宗教的世界観があるとする。即ち，修験者の即身成仏の観念は，修行や籠りを経て自身が聖なる存在と一体化できると自覚する。その上で呪術宗教的な力を行使し，操作能力を験力として発揮できた。これは神子自身が自己の行なう修法や儀礼に自信を持つ一方，それを信頼している地域の人々の支持で支えられてきた。一方，神子も神楽衆も，独自の修行の過程をもち，その内容は通底するが，各々の立場で自己主張を行なうことも明らかにしている。

最後に，結論として神子が宗教的職能者としての自立化の過程を歩んできたこと，神子の儀礼と世界観の考察を通じて憑依から統御へと動態的に活動する諸相を明らかにしたことを述べ，従来の研究史にない枠組みで巫女と修験の在り方を分析したと結んでいる。

以上のように本論文は，陸中沿岸で活動する巫女である神子に焦点をあて，広範かつ緻密な地域調査と文献史料の分析により，その実態を究明し，日本のシャーマニズム研究の中に位置付けた功績は高く評価される。特に従来の研究が盲目の民間巫女（イタコ，イチコ）や修行型或いは召命型巫女（ゴミソ，カミサマ）を主体としていたのに対し，社祠祭祀に直結する「修験系神子」の残存に注目し，その歴史的推移を詳細に辿ると共に，近世後期や幕末維新の変革期，そして戦後の近代化を乗り越えて地域の宗教的要請に対応した諸実態を解明した点は，高く評価されよう。本論文の指摘した新局面は，日本のシャーマニズム研究の盲点を衝いた論考として結実しており，かつ修験道研究に新視点を切り開いたものと言えよう。特に，第２部の神子と修験の交流の分析は，これまで個々の論文はあったものの，包括的・総合的にまとめたきわめて独創的な画期的業績と言える。

但し，詳細に論文を検討していくと，未だ種々の問題点が残されており，それを今後の課題として指摘しておきたい。第一に神子の実態についての分析や考察は適切であるが，陸中沿岸地方においてなぜ神子・イダッコ・カミツケの三分類が生じたのかについては未だ解明されていないように思われる。第二に神子と修験については，「修験系神子」の独自の活躍状況，神子の関与する霞と霞以外の地域との比較，修験の組織化との対応，東北の他地域との差異など考察の余地が残されている。第三に概念の提示についてで，他地域との比較を考慮すると，神子という地域名を使うよりも「修験系巫女」とした方が適切ではなかったかとも考えられる。第四に本論文の核心をなす世界観の表出はかなり成功しているが，やや抽象度が高く迫真性に欠ける面もある。神子のライフ・ヒストリーを中心にして実態を解明し，そこから遡及分析して結論を導けば説得性に富む結論を提示出来たのではないだろうか。しかし，本論文は個々に指摘した問題点についても，既に豊富な資料提示や考察・分析を行なっており，今後の研究の展開の中でより高い完成度を求めるという期待をこめて，あえて課題として提示した次第である。

上記の審査の結果により，筆者は本論文によって博士（社会学）の学位を受けるに値するものと認められる。